西ドイツ映画『白バラは死なず』の自主上映をして

管　理　人

学生時代「白バラは散らず」という一冊の本と出会った。それが、「白バラ抵抗運動」という反ナチ抵抗運動を知った最初だった。十数年前のことである。ナチ支配下のミュンヘン大学の五人の学生と哲学の教授が、「白バラ」と名付けられた反戦ビラを出し、ナチ当局の執拗な追跡の前に、逮捕、処刑されたという歴史の事実は、学生である当時の私に衝撃的だった。

べ平連の運動に関わっていた私は、べ平連名でビラを作っていたが、彼らの活動に触発され「Ｆ・Ｆ研・白バラ団」なるグループ名でビラを作って配ったこともある。そのビラを受けとる知人のけげんな顔に、これは反ナチ抵抗集団の名に由来しているのだと説明するのは、彼らに連帯しているのだとひそかに心に思っていたかったからであった。「F・F 研・白バラ団」は「ファシズム研究フラク・白バラ抵抗運動を知る会」の略称としたのだが、実体は、私一人であった。

一昨年の暮れ、その「白バラ」の映画が、大映の手によって日本で公開された。いても立ってもいられず新宿の映画館に行って見たのだった。そして、感動のあまり、翌日、大映に電話をしていた。電話は、三多摩でも上映する予定があるのか、もしなければ、ぜひ自主上映したいが、それができるか、という主旨であった。大映は、ぶっきらぼうな私の質問に快く答えてくれた。三多摩では上映する予定はない。自主上映は、ぜひやって欲しい。でも、今、現在１６ミリのフィルムに焼き直しをしてないので、来年（１９８６年）になったら再び電話して欲しい。その際には、立川での自主上映を最優先する・・・、ということだった。

そして、１９８６年、再び大映へ連絡。１６ミリは、共同映画を通して自主上映へ配給する。使用料は、十万円ということで貸出し条件が決定したことを聞き、一番最初に予約した。

さて、一口に自主上映といっても公立のライブラリーで借りて、無料で上映というのとは大ちがい、まずは、上映のための人集めから始めた。幸い、地域で、「戦争を語りつぐ」などの活動を地道に（と思っているが）続けてきたおかげで、多くの仲間が協力してくれた。本当に、こうした関係は、心強いものだ。そして上映の実行委員会を作って３カ月、１２月６、７日にやっと上映にこぎつけた。上映当日まで何人来てくれるか不安であったが、上映は、大成功。２５０名もの人々が見にきてくれた。

この自主上映は、いろいろな面で収穫をもたらしてくれた。

一つは、いろいろな出会いがあったこと。

一つは、この映画の実行委員会の作り方がきっかけになり、後に、亀井文夫さんの「トリ・ムシ・サカナの子守歌」の自主上映につながっていき、さらに、広く多くの人の協

力で上映できたこと。
　一つは、こちらが真剣にとりくめば、応えてくれる人が必ずいるということ。
　などなど。

　歴史の教科書の書き直しをさせては、韓国や中国から非難されるのとはちがって、西ドイツの高校では、歴史の副教材に、この「白バラ」が今でもとりあげられていると聞く。暗い歴史をくり返さぬために、私たちは、過去から学ばねばならない。「白バラ」は、私たちの国の歴史を対象化する一つの視点を与えてくれる。
　私の部屋には、まだ「白バラは死なず」のポスターが貼ってある。当分は、はずしたくない。

１９８７．６．１５